

「掘る」

—初稿—

2026/8/12

脚本 太郎

〈人物表〉

一ノ瀬 創 (24)

サラリーマン

創の弟。大学生

一ノ瀬 巡 (21)

1. 駅・改札（昼）

一ノ瀬創（24）、改札の外側で壁に背を預けながら待ちくたびれたような様子で立っている。

苛立たしげに時計を見る。

一ノ瀬巡（21）、改札の向こうから歩いてくる。

創、それに気付くと、溜息。

巡、改札を抜けると、創に手を挙げる。

創 「人待たしてんだから早くして」

巡、苦笑いで腕時計を見て、

巡 「いや全然時間前だけど」

創、顔を顰める。

二人のリュックのサイドポケットにはシャベルが刺さっている。

何も言わずにさっさと歩き出す。

巡、悩まし気な表情でついていく。

2. ロードサイド（昼）

二車線の広い国道の歩道。

創が早足で先導し、その後ろを少し遅れて巡が歩いている。二人とも無言。

日差しが激しい。

二人は激しく汗をかいている。

巡、うんざりしたようにタオルで首筋の汗をぬぐう。

3. 山・麓（昼）

創と巡、一本の木の根元を、シャベルで掘り進めている。

二人、息が上がっている。

創、それでも手を休めずに掘り進めている。

巡、動きが緩慢。

巡 「ビクともしないね」

創、無視する。

巡 「参るね。これじゃあと何年かかるか」

創、動きを止め、目を剥いて叫ぶ。

創 「口じゃなくて手動かせよ」

巡、辟易した表情。

空を見上げる。

雲行きが怪しくなっている。

× × ×

雨が降っている。

二人、びしょ濡れになりながらも岩を掘っている。

巡、手を止めて息を吐く。

巡 「兄貴、さすがに今日はもう無理だよ。帰ろう」

創 「うるっせえな。てめえ一人で帰れよ」

巡 「せめて一旦どっかで雨宿りしよう」

創、手を止めて巡を睨みつける。

創 「だからてめえ一人で行けよ」

巡、息を詰まらせる。

創、作業を再開する。

創 「そもそもお前があんなガキみたいなことしてなきやこうはならなかった」

巡 「今更それ言う？ 大体兄貴だって」

創 「うるさい」

巡 「そっちが話しかけてきたんじゃん」

創、無視する。

巡、木の幹に触る。

巡 「大体この木で合ってるの？」

創、苛ついた様子で、

創 「合ってるよ。お前だって見てただろうが」

巡、苦い顔で目線を泳がせて、

巡 「見てたけど、似たような木いっぱいあんじゃん。これだったか、俺は自信ないな」

創、シャベルを地面に突き刺して、喚く。

創 「これだったよ。俺がこれだって言ったらこれなんだよ」

巡、うんざりした様子で、溜息。

シャベルを地面に突き刺す。

巡 「はいはい。分かりましたよ」

巡、気まずそうに突っ立っている。

やがて踵を返して歩き出す。

巡 「もう勝手にして。俺帰るから」

創 「そつちこそ勝手にしろ馬鹿」

創、穴掘りを再開。

巡、去る。

× × ×

創、息を切らして、疲れ切った様子で穴掘りをして
いる。

足音。レインコートを着た巡が現れる。手に別のレ
インコートを持っている。

創、巡に気付いて、

創 「帰ったんじゃないのかよ」

巡、創にレインコートを手渡し、

「お礼言えないの？」

創、レインコートを受け取って、

「ここまでずぶぬれになったらこんなのあっても意味ねえ
よ」

シャベルを地面に刺す。

レインコートを着る。

巡、自分のシャベルを引き抜いて苦笑い。

「そう言ってるし」

「うるせえよ」

創と巡、穴掘りを再開。

× × ×

二人、すっかり息を荒げている。

巡、額を拭って、ポツリと、

「正直、墓参りでもした方がずっと有意義なんじゃないか
と思うけど」

創、苛立った様子で巡を睨んで、

「は？」

巡、驚いて顔を引きつらせる。

「気まずそうに、

「いちいちキレんなよ」

「お前も本当に天邪鬼な奴だな。やる気あるのかなのか、

どっちなんだよ?」

「兄貴まさかさ、今日一日で全部掘り出そうとしてないよね? 木の根って結構深くまで張ってるらしいよ?」

「まさか」

「じゃあいつまで掘るの?」

「キリの良いところまで」

「いや具体的には? 基準が分かんないんだけど」

創、無言。

「考えなしだよ」

巡、立ち眩みがして額をおさえる。

ふらついて、

「いや本当さ、そういうところ前から……」

巡、倒れる。

倒れた先、頭の位置に丁度大きな石があり、ぶつかる。目を見開く。

巡、動かなくなる。

創、それには気付かず、一心不乱に穴を掘り続けている。

× × ×

シャベルの倒れる音。

創、驚愕の表情。

倒れた巡を見下ろしている。

巡、ピクリとも動かない。

終